

羊に関するイメージ考察

——中国のことばと文化——

鄭 高 咏

要 旨

古代中国において、羊は単なる家畜ではなく、大切な供え物であり、ありがたい瑞獣でもあった。羊への神聖視は何も古代に限ったことではなく、後漢の許慎が撰した『説文解字』に“羊，祥也”（羊は祥なり）とあるように、羊と吉祥は同一と見なされ、“大吉大利”（上々吉）のことを古くは“大吉羊”といていた。「羊」の字を含む漢字を見ても良い意味のものばかりで、例えば“美”は、羊の角を頭に着けた姿を美しいと考えた古代人たちの美的センスから生まれた字であり、中国の貴州や広西に暮らすある少数民族の間には、羊の角を吉祥と善美のシンボルとして壁に飾る風習が今でも残っている。羊の下に四つ点を添えれば、孝行の美德として知られる“羊羔跪乳”（子羊がひざまずいて乳を飲む）の“羔”（子羊）となり、さらに、善行、善良、慈善の“善”もまた「羊」に由来する漢字である。“美”の字源をさかのぼれば必ず羊に行き着き、また『説文解字』にある“羊大則美”（肥えて大きな羊が美である）、“羊，祥也”などの記述が示す通り、「羊」は美のシンボルであると同時に、富と吉祥のシンボルでもある。このため、「羊」にまつわる言葉には当然のことながら、そのおとなしさ、善良さ、か弱さ、素晴らしさを反映したものがあるが、実はこうした言葉は少数派で、今日用いられている慣用語の大部分は、“羊入虎口”（子羊が虎口に入る）、“羊质虎形”（虎の皮をかぶった羊）、“平时如狼，危时如羊”（平時は狼、非常時は羊）という具合に、羊を虎や狼と引

き比べて、羊の「軟弱」な面を浮き彫りにしている。一般的に「羊」といえば良いイメージが強いが、言語における「羊」のイメージは中性、つまり悪くはないが良くもないのである。本稿では今日に伝わる「羊」の成語やことわざ、民話に語られる「羊」、そして十二支の「羊」など、「羊のイメージ」を物語る語彙や文化を考察の対象とし、そのイメージを明確にすることを試みた。

キーワード： 字源、羊と美、言語における羊、民話における羊、羊と十二支、イメージ

1 「羊」の字源と別名

「羊」は中国でも「六畜」の一つに数えられる。人類が野生の羊を家畜化したのは遠い昔のことであり、古代人たちは「羊」をつぶさに観察し、細部まで知り尽くしていた。だからこそ彼らが作り出した「羊」の字は写実的で分かりやすく、その英知と表現力の豊かさがうかがえる。誰もがよく知る「羊」は頭頂が平らで、下向きにぐるりと丸まった二つの角、大きな耳、あご髭、そして短くてひしゃげたしっぽを持っているが、とりわけユニークなのはその頭部であり、古代人たちは羊の頭部の特徴を捉えて「羊」の字を作った。「牛」の字同様、全身の代わりに局部を採用したのである。近世に出土した殷代の“羊鼎”（羊を煮るのに用いた金属の器）に刻まれた「羊」（図1）は、原始部族が紋章として用いていた文字という点でも「牛」の字と共通しており、この極めてシンプルな文様の中に、渦巻き状の角、大きな耳、とがった口、山羊髭と、羊の頭部の印象的な部分がすべて凝縮されている。しかしこの「羊」を見事に活写した文字は、発展の過程で字形が大きく変化し、「牛」の字よりもさらに原形から掛け離れていく。甲骨文字（図2）では鼻梁（中央の縦線）が現れ、左右の耳は1本の横線に変化し、頭全体が縦に伸びて、面で表現されていた顔は見る影もないほどやせこけている。金文（図3）の「羊」は角の湾曲が緩やかになり、あご髭は十字形になった。小篆（図4）の角に至ってはもはや原形をとどめておらず、渦巻き状ではなくなっているが、次に続く隸書（図5）ではさらなる大変化が起こっている。角が「前」の字の冠（ ）に、あごが長い横線に変わったのである。楷書（図6）もこれを踏襲し、最終的には羊の髭と鼻梁は一筋の縦線となり、「羊」の面影を探すのは困難になってしまった。

羊に関するイメージ考察



図1
(羊鼎の文様)



図2
(甲骨文字)



図3
(金文)



図4
(小篆)



図5
(隸書)



図6
(楷書)

古代人たちは「羊」を家畜として扱う以外に祭祀の供物とし、かつ縁起の良い動物として珍重した。後漢の許慎による『説文解字』には、「羊、祥也。」、つまり「羊」イコール「祥」とする記述があり、先人たちは「大吉大利」（上々吉）のことを「大吉羊」と呼んでいた。また「羊」から作り出された漢字はいずれも良い意味を有している。例えば、古代人たちは頭に羊の角を着けた姿を“美”と考えていたが、今日でも貴州や広西には羊の角を縁起物として壁に飾る少数民族がいる。「羊」の下に四つ点を添えると子羊を意味する“羔”という字になるが、「羊羔跪乳」（子羊がひざまずいて乳を飲む）は“孝道”（孝行の道）の美德とされている。“善”の字も「羊」から作られた漢字であり、正しい行い、純真で素直、慈悲深い、という意味がある。“羌”の甲骨文字は1対の羊の角を頭上に頂いた人をかたどっており、羌族が羊の放牧をなりわいとする氏族であることを示している。さらに清代初期の文学者、屈大均は『広東新語』という著作の中で次のようなことを述べている。東南の沿海地域では魚には恵まれていたものの羊の数は少なく、人々はまず羊肉を味わうことができなかった。片や北西の黄土高原では羊こそたくさんいたが、魚となるとめったにお目に掛かれるものではなく、従って人々が魚を口にする機会はほとんどなかった。そこで古代人たちは両地で手に入りやすかった「魚」と「羊」を組み合わせることで“鮮”なる漢字を編み出したのだが、珍味と珍味が並ぶこの字の意味はずばり「うまい」であり、また希少という点から、古典中国語では「少ない」という意味もあった。このほか、『詩経』の『小雅・無羊』篇に“谁谓尔无羊，三百维群。”（羊がないなどと誰が言ったのか、300

もの羊が群れをなしているというのに)、^{じょげん}徐鉉による『説文解字』の注には“羊性好群。”(羊は群れることを好む)との記載があるように、羊には群れをなすという大きな特徴があるため“群众”(群衆)などの語彙も生まれた。「羊」にちなんで付けられた地名も多く、一例を挙げれば、広州の別称は“羊城”というが、この名が付けられた背景には美しい伝説がある。昔々、穀物の穂をくわえた5匹の羊に乗って、5人の仙人が広州に舞い降りた。彼らは6本の穂を人々に与え、この地の民の幸福と無病息災、そして永遠の豊穰を祈るとどこかへと去っていったが、羊たちはその場で瞬く間に五つの巨石に変わったという。今日、広州市の越秀公園内にある五羊山には、高さ11メートルの5匹の羊の石像がそびえ立っており、街のシンボルとなっている。

また、古代中国では羊にはいくつかの別名があった。例えば“长髯主簿”(晋の崔豹の『古今注』では“髯须主簿”と記されている)、これは雄山羊¹⁾のあごに“髯”(髭)があることから生まれた呼称であり、これに類するものが、南朝の梁の人、任昉^{じんぼう}が著した『述異記』巻上の“古人说。羊一名胡髯郎。又名青鸟。”(古人の言によれば、羊には胡髯郎、青鳥なる別名がある)という記述に見受けられる。このほか羊は、“柔毛”、“少牢”、“雨工”、“羶根”、“白石道人”、“犒牽”、“细肋”などとも呼ばれていた。さらに中国語には羊に関する漢字も多数あり、子羊は“羔”というが、“牽”もまた子羊のことである。“羴”、“羴”、“羴”も子羊を表す漢字であるが、それぞれ生後5ヵ月、6ヵ月、1歳未満の子羊を意味する。雄羊は“羴”、あるいは“羴”で、“羴”は白くて大きな雄羊、“羴”は黒い雄羊である。去勢された雄羊を表す漢字には“羴”や“羴”があるが、前者は野生の雌羊をいうこともある。雌羊は“羴”で、“羴”は黒い雌羊を指す。年齢や性以外の特徴を表す字もあり、“羴”は腹部が黄色い羊、“羴”は角がない羊、“羴”は体の大きさが6尺もある大きな羊、“羴”は内臓を除去された羊、“羴”は細い角を持つ山羊、“羴”は野生の羊である。これらの漢字に動物分類学上の意義はないが、古代中国の羊文化の多彩さを示す格好の材料といえよう。

2 羊と“美”の関係

『説文解字』は“美”について、“美、甘也。从羊大。羊在六畜主给膳也。美与善同意。”(美とはうまいことであり、羊と大からなる。羊は六畜の中でも主に食用に供されるものであり、美と善は同意である)と解釈している。これに従うなら、“美”の字は「肥えて大きな羊は美味である」ことを表し、“美”という抽象的な形容詞は人間の味覚に由来しているということになるが、この説は先人たちの“民以食为天”(民は食をもって天となす)という考えをも反映している。『説文解字』の著者である後漢の学者、許慎の「美=羊+大」説は“美”を六書のうちの会意文字と解釈するもので、宋代の徐鉉や清代の段玉裁など、

著名な学者たちもこれに賛同しており、ほぼ定説となっている。しかし、河南省安陽の殷墟から発見された甲骨文字の研究が徐々に進み、かつ文化人類学が盛んになるにつれて、「美=羊+大」説は次第に疑問視されるようになり、「美」の字を象形文字と解する「美=羊+人」説が登場した。この説では、「美」の字源は、古代人たちが羊の角をアクセサリーとして頭に着けて踊っていた、あるいはトーテムを祭る聖なる儀式の際に羊の角を頂いていたことにさかのぼるとしている。その論点²⁾は、狩猟の必要から身に着けていた物が、やがて身を飾るための道具へと進化していくプロセスであり、美意識の成り立ちをつまびらかにして、多くの人々に認められた。またトーテムの角度から「美」の字を解釈する説³⁾もある。それによれば、「美」の甲骨文字にはいくつかの書き方があるが、いずれもトーテムのシンボルを頭上に載せた人の姿をかたどっており、羊の角を頭に着けた部族によって考案された字こそ「美」で、古代人の目にはこうしたイメージが美しく映っていたのだという。この説と先の狩猟説はアプローチの違いはあれど、どちらも「美=羊+人」説をさらに説得力あるものに行っていることに変わりはない。ところが、殷代の人々が崇拜していたトーテムは玄鳥であって羊ではなかった、という見地から、トーテム説に基づいて「美=羊+人」とするのは適当ではない、そもそも羊は女性の象徴であったのだ、と見る学者⁴⁾もいる。この説は殷代の「美」の字を論拠として挙げ、当時は「美」を「𠄎」と書いたが、この最上部は羊を表す羊の角、下は「人間」の全身で、その形が身ごもった女性の姿を彷彿とさせることから、先人たちは大きな腹の妊婦を美しいと考えていたのではないかとしており、この観点もまた一部の学者の賛同を得ている。いずれにせよ、以上の観点すべてに共通していえるのは、今も昔も「美」の字解は「羊」抜きにしては語れない、つまり「羊」と「美」は切っても切れない関係にある、ということである。

3 言語における「羊」

羊文化は中国の言葉や文字に多大な影響を与えた。中国語には「羊」を部首とする字が数多くあり、現在出版されている字書の中でも豊富な収録字数を誇る『漢語大字典』の「羊部」には204字が掲載されている。羊を姓や名とするのはトーテム文化の名残であり、名称に羊と付く動植物も、「紗羊」、「常羊」、「羊角石」、「羊枣」などバラエティー豊かである。また、羊の脂肪の塊は真っ白で、きめが細かく柔らかいので、よくもち肌のことを「白如羊脂」（羊の脂のように白い）と形容する。病名にも羊が付くものがあり、痙攣や失神を引き起こす「癲癩」（癩癩）は、患者が発作時に口から泡を吹き、羊のような声を発することから「羊癲風」、あるいは「羊角風」とも呼ばれる。「羊角」とはつむじ風のことで、これは渦巻き状の羊の角と似ていることにちなんだ呼称であるが、同時にナツメの木の別名でもある。羊毛で作った筆、「羊毫」は柔らかくしなやかという特徴があり、書画の世界

では最も使いやすい筆とされている。さらに、羊は方向音痴なので、とにかく先頭の羊の後に付いて行く習性があり、ここから、無定見でいつも人の尻馬に乗る人のことを“羊性”という。では次に、成語や慣用語の中の羊を眺めていこう。

“羊腸鳥道”（羊の腸と鳥の通う道）

“羊腸小道”，“羊腸小径”ともいう。唐の玄宗皇帝が詠んだ『早登太行山中言志』という詩の一節，“火龙明鸟道，铁骑绕羊肠。”に由来する言葉で、この詩句は、山道が羊の腸のように曲がりくねり、通れるのは鳥ぐらいのものである、という意味である。「羊腸」とは元々戦国時代の趙の国にあった難所の名前で、ここは現在山西省に属しているが、後に「羊腸」の地のように山道が細く、幾重にも折れ曲がっている様を“羊腸”というようになった。“鳥道”とは足場がないことで、険しい山道のたとえである。後世、李隆基（玄宗）の詩から“羊腸鳥道”という成語が生まれ、狭く険しいつづら折りの山道のたとえとなった。現代中国語では“羊腸小道”ということが多いが、これは引用されるうちに、韻が同じである“鳥”と“小”が入れ替わってしまった結果である。これにより意味は若干変わったものの、比喩全体の意味に変わりはなく、やはり蛇行した隘路を指す。例文：“这位著名的中药研究家，走遍了深山老林，踏出了一条条羊肠小道，为后人创造了财富。”（その有名な漢方の研究家は、山奥や原生林を歩き回って幾筋もの小道を踏み固め、後人に貴重な財産を残した）

“羊质虎皮”（虎の皮をかぶった羊）

漢代の揚雄が著した『法言・第2巻・吾子』の“羊质而虎皮，见草而悦，见豺而战，忘其皮之虎矣。”から出た言葉である。ある時、自分の姓名は孔丘で、字は仲尼である、と名乗る人が現れた。そこで人々がこの人を訪ねてみると、孔子が在りし日に身に付けていたものと同じような着物を着て、同じような文机を使って……、と何もかもが孔子そっくりであったという。これを聞いた揚雄は、その者は見掛けが孔子に似ているだけの偽者であると断じ、続けて語ったのが先の言葉であり、彼はこう述べた。「それは羊が虎の皮をかぶったようなもので、相変わらず草を見れば喜ぶであろうし、臆病な性は変わっていないのだから、山犬や狼を見ればやはり震え上がり、虎の皮をかぶっていることを忘れてしまっだろう。」この成語は、外見をいかに取り繕っても本質は変えられないこと、あるいは、見掛けは強そうだが実は気が弱いことのたとえである。“羊质虎形”，“虎形羊质”ともいい、書き言葉で用いるマイナス評価の語である。現代の用法：“你看这伙人表面上称王称霸，但实际上是羊质虎皮。”（やつらはああやって威張り散らしているが、実は見掛け倒しのさ）

“羊狼狼貪”（羊の獐猛さと狼の貪欲さ）

漢代の司馬遷による『史記・第7巻・項羽本紀』の“猛如虎，狼如羊，貪如狼，強不可

羊に関するイメージ考察

使者、皆斬之。”(虎のように荒々しく、羊のように執念深く、狼のように意地汚く、かつ強くとも役に立たぬ者は、すべて斬罪に処す)から生まれた言葉である。羊が“狼”(執念深い)というのは、地中に生えた草を食べるには相当な労力を要するので、羊といえども“狼勁”(執着心)がなければ餌にありつけないことから来ている⁵⁾。先に挙げた史記のくだりは当時の楚の国の司令官、“卿子冠軍”であった宋義が出した命令中の一文である。かつてこの成語は、血も涙もなく、ひたすら権勢や利益を追い求めることのたとえとして用いられていたが、やがて貪欲な役人が、民衆を食い物にすることのたとえともなった。マイナス評価の語で、書き言葉として用いる。現代の用法：“政治家要廉洁奉公、光明磊落、那些羊狼狼贪的做法终究会暴露于众的。”(政治家は清廉潔白、公正無私を旨とすべきであり、あんな強欲非道なやり方はいずれ明るみに出るに違いない)

“羊落虎口”(子羊が虎口に落ちる)

生きるか死ぬかの瀬戸際に立たされることである。元の朱凱の『昊天塔』の一節、“俺家姓楊、被番兵陷在虎口交牙峪里。这个叫做羊落虎口、正犯了兵家忌。”(私は楊という者だが、異民族の兵によって絶体絶命の窮地に追い込まれた。これぞ「子羊が虎口に落ちる」で、兵法家の禁忌を犯してしまった)が典故である。“羊入虎口”ともいい、弱者が危機的状況に陥り、命の危険にさらされることのたとえである。話し言葉、書き言葉、どちらでも用いられ、主に人についていう。現代の用法：“那个姑娘落到坏人的手里、真是羊落虎口啊！”(あの娘が悪いやつ手に落ちたぞ。虎口に落ちた子羊とは正にこのことだ)

“亡羊补牢”(羊を失い牢を補う)

語源となった故事は『戦国策・楚策四』にある。楚の頃襄王は享楽におぼれ、政をないがしろにしていたため、義憤を感じた荘辛がこれを諫めたが、彼の言は聞き入れられなかった。やがて楚の都は秦の武将、白起によって陥落し、都落ちした頃襄王は、楚を去って趙に身を寄せていた荘辛を召し出して、劣勢挽回の策を請うた。そこで彼は、「俚諺にありますように、兎を見てから獵犬を探しても決して遅くはなく、また羊に逃げられてから囲いの破れを直してもやはり遅過ぎるということはございません。その昔、殷の湯王も周の文王もわずかばかりの領地から出発して、やがて天下を取ったのです。ここで王が前非を悔い、心を改められれば、失地回復もかないましょう」と述べ、この献策から“亡羊补牢”は、事が起こってからもただちに手を打てば取り返しがつくことのたとえとなった。プラス評価の語で、現代中国語では話し言葉、また書き言葉としてできごとについて用いられ、よくこの後に“犹未为晚”(まだ遅くない)という言葉が続く。例文：“要从这次失败中找出原因，吸取教训，亡羊补牢，犹未为晚。”(今回の失敗の原因を明らかにして教訓としよう。まだ手遅れではない、二度とこんなことが起こらないよう善処すればいい)

“顺手牵羊”(ついでに羊を引いていく)

元の尚仲賢の『單鞭奪槊』にある“是我把右手带住马，左手揪着他眼札毛，顺手牵羊一般牵他回来了。”（私は右手で馬の手綱を取り，左手でやつの首根っこをふんづかまえて，ちょいと羊を引くようにして連れてきた）が出典である。本来は勢いに乗じて敵を捕らえることのたとえであったが，現在ではどさくさに紛れて人の物を持ち去ること，あるいは何かのついでに苦もなく事を成すことのたとえとなっている。褒貶いづれにも偏らない中性の語で，主に話し言葉で用いられ，泥棒行為を形容することが多い。例文：“她常常顺手牵羊，把公司的东西往家里拿。”（彼女は行きがけの駄賃とばかりに，しょっちゅう会社の備品を家に持ち帰っている）

“歧路亡羊”（多岐亡羊）

この成語の典拠となった『列子・説符』の故事を次に引用しよう。“杨子之邻人忘羊，既率其党，又请杨子之竖追之。杨子曰：‘嘻！亡一羊，何追者之众？’邻人曰：‘多歧路。’既返，问：‘获羊乎？’曰：‘亡之矣。’曰：‘奚亡之？’曰：‘歧路之中又有歧焉，吾不知所之，所以反也。’”この文意は次の通りである。「楊子の隣人の羊が逃げ出してしまい，隣人は楊子の下男まで駆り出して，大勢で羊を探させた。羊1頭探すぐらいで，なぜこれほどの大人数が必要なのかと，楊子が不思議に思って尋ねたところ，隣人は答えた。『分かれ道がたくさんあるからだ。ところが分かれ道の先はさらに枝分かれしており，結局羊は見付からず，手ぶらで戻ってきた。』」ここから“歧路亡羊”，“多路亡羊”，“羊歧”という言葉が生まれたが，これらはいずれも，物事の道理が複雑多岐にわたっているため進むべき方向が分からず，誤った道に踏み入ってしまうことのたとえである。また，学問の道があまりにもいろいろ分かれているため，適切な方法を見出して真理を究めるのが困難であることをたとえる場合もある。意味的に中性の語で，主に書き言葉として，しばしば事後に非を認めて釈明する際に用いられる。現代の用法：“事情如此复杂，谁也没有办法处理，歧路亡羊嘛。”（事態がここまで複雑になってしまったらもうお手上げだ。進むべき方向が見えてこない）

“十羊九牧”（10匹の羊に9人の羊飼い）

『隋書・楊尚希伝』の“窃见当今群县，倍多于古……所谓民少官多，十羊九牧。”（私が見ますところ，現在，群や県が以前より倍増しております。……民は少ないのに役人が多過ぎ，羊飼いが9人で10匹の羊の世話をしているようなものでございます）が出典で，民に対して役人がいたずらに多く，苛斂誅求が行われることのたとえである。またこの成語は，命令がまちまちで，どれに従うべきが分からなくなることをいう際にも用いられ，こちらの用法は，唐の劉知幾の『史通・忤時』の“杨令公则云必须直词，宗尚书则云宜多隐恶，十羊九牧，其令难行。一国三公，适从何在。”（楊令公はありのままを報告せよと言うが，宗尚書は良くないことは隠蔽せよと言う。船頭多くして船山に登るで，命令がなかな

か実行されない。指図する人が多過ぎて、一体誰の言うことを聞けばいいのだろうか)に見られる。現代中国語ではあまり用いられず、まれに見掛ける程度の語である。

“羊头狗肉”(羊頭狗肉)

普通は“挂羊头，卖狗肉”(羊頭を掲げて狗肉を売る)といい、看板倒れ、裏表があることのたとえである。この語のオリジナルは『晏子春秋・内篇雜下』に出てくるが、それは牛と馬にまつわるもので、本来、羊や犬はこの成語と無縁であった。では“羊头”と“狗肉”の組み合わせはどこから来たかという、禅宗の典籍、『続伝灯録』巻三十一にある曇華(1103~1163)禅師の言葉、“……二十年来坐曲泉床，悬羊头卖狗肉，知它有甚凭据！虽然，一年一度烧香日，千古令人恨转深。”(……20年来禅僧として曲泉^{きょくせん}⁶⁾に座し、羊頭を掲げて狗肉を売ってきてしまったが、禅には何の根拠もないことを知った。法要は年に一度しかないが、この悔恨は深まりこそすれ、永遠に消えることはないであろう)からである。マイナス評価の語で、主に話し言葉として用いる。多く政治の欺瞞についていうが、コピー商品を指すこともある。現代の用法：“这家商店挂羊头，卖狗肉，净卖假货。”(この店は看板に偽りありだ。偽物ばかりを売っている)

“羝羊触藩”(ていよう羝羊，まがきに触れる)

李白の詩、『留別于十一見逖斐十三游塞垣』に、“天张云卷有时节，吾徒莫叹羝触藩。”という一節がある。この詩句は、天は晴れることもあれば曇ることもあり、雲は渦巻くこともあればかき消えることもあるのだから、垣根に角を取られた雄羊のように身動きがとれないとよくよするのはやめようではないか、という意味で、前向きで楽観的な情感にあふれているが、ここで李白が用いた“羝触藩”は『易・大壮』にある“羝羊触藩，不能退，不能遂。”に基づいている。“羝羊”とは雄羊のことで、この文意は、雄羊の角が垣根に引っ掛かり、退くことも進むこともできない、というものであり、後にこの成語はジレンマに陥ることのたとえとなった。羊はよく垣根や囲いを角でつつくことから、民間には“羝羊触藩”以外に、“羊头插在篱笆内，伸首容易缩首难”(羊が垣根に頭を突っ込んだ、突っ込むのは簡単、引っっこ抜くのは大変)ということわざがあり、これもやはりジレンマに陥るという意味である。

このほか羊にちなんだ成語には“虎入羊群”があるが、これについては「虎」の項を参照していただきたい。

“羊毛出在羊身上”

羊毛は羊から取れる。得したつもりが、その出所が実は自分であること、あるいはさまざまな負担を人に押し付けることをいう。マイナス評価の語で、話し言葉、書き言葉、いずれでも用いる。例文：“看上去是白给了我们这么多礼品，细想起来，这也是羊毛出在羊身上。”(こんなにたくさん景品をもらったけど、よくよく考えてみると、この費用も私た

ちの財布から出ているのよね)

“五马换六羊”

5匹の馬を6匹の羊に換える。次から次へと交換することのたとえであるが、馬5匹に羊6匹とは、数の上では増えているものの、価値は下がっていることから、多くマイナスのニュアンスを含む。話し言葉としても、書き言葉としても用いる。例文：“他自以为聪明，总是五马换六羊地折腾，到头来吃亏的仍然是他自己。”（彼は自分が賢いと思い込んでいるが、取っ替え引っ替えするばかりで、結局ばかりを見ている）

“羊群里跑出骆驼来”

羊の群れにラクダが現れる。羊よりも格段に背の高いラクダが羊の大群の中に紛れていれば、いやが上にも目立つことから、多くの凡人の中から優れた人物が出ることのたとえである。意味的に中性の語で、主に話し言葉で用いる。例文：“这所高中并不是北京市重点学校，往年的高考成绩也很一般，可没想到今年却出了个英语状元，如同羊群里跑出骆驼来，引起了人们的关注。”（この高校は北京市の進学校というわけではなく、例年の大学入試の成績も並といったところだが、今年はこの生徒が英語でトップを取り、これぞ鶏群の一鶴と人々の耳目を集めた）

“羊肉不曾吃，空惹一身膻”

羊の肉など食べたこともないのに体中が生臭い。“膻”とは羊の臭みであり、羊肉を口にしていないにもかかわらず、そのにおいをぷんぷんさせるといこの言葉は、何もいい思いをしていないどころか、かえって汚名を着せられることのたとえである。マイナス評価の語で、話し言葉として用いることが多い。例文：“那是个是非之地，你最好少去，不然会羊肉不曾吃，空惹一身膻的。”（あそこは厄介な所だから、あまり近付かない方がいい。じゃないと、あらぬうわさを立てられるぞ）

“平时如狼，危时如羊”

平時は狼、非常時は羊。ふだんは狼のように恐ろしいが、いざという時には羊のように腰抜けになってしまうことをいう。マイナス評価の語で、話し言葉、書き言葉のいずれでも用いる。例文：“他平时威风凛凛，可遇到危险境地，真正要靠他的时候，却一反常态。真是平时如狼，危时如羊，不像个男子汉。”（彼は普段威張っているくせに、本当に助けて欲しいようなピンチになると手の平を返したように態度を変える。いつもは狼なのに、肝心な時には羊になっちゃって、本当にふがいないんだから）

“羊尾巴盖不住屁股”

羊の尾では尻を隠しきれない。細く小さな羊のしっぽでは、とても尻全体を覆い隠せないことから、隠し事をしようとしても、力量不足で隠し通すことができず、結局ばれてしまうことをいう。マイナス評価の語である。例文：“他总是在女孩子面前显示自己如何能

羊に関するイメージ考察

干，如何有材，其实你多和他谈谈话就知道到底怎么回事了。俗话说，羊尾巴盖不住屁股。”（あいつは女の子の前では、自分のことを有能なやり手だとアピールしているけど、ちょっと話してみればすぐに化けの皮がはがれるよ。羊のしっぽじゃ尻は隠せないってやつさ）

“羊群和睦，狼不敢捉”

羊が仲良く群れ集ってれば、狼も手を出せない。羊が群れをなす習性は、自然界における長い長い繁殖の過程の中で培われてきた生きるための知恵であるが、この摂理は人間をも啓発し、民間ではこの言葉に類する成句もいくつが生まれた。例えば、“绵羊一离群，就会被狼吃掉”（群れからはぐれたメンヨウは狼の餌食になる）は、人は一人では生きていけないことのたとえ，“一只山羊被狼吃掉，十只山羊把狼吓跑”（山羊は1匹だと狼に食われるが、10匹なら狼を追い払う）は、どんなに弱い人でも、みんなで一致団結すれば強敵を倒すことができるというたとえである。例文：“俗话说‘羊群和睦，狼不敢捉。’我们大家要团结起来，共同对付这伙坏人。”（「狼も羊の群れには手出ししない」ものだ。我々は一丸となって、あの悪党に立ち向かおう）

“美”という字の原形は羊をかたどり、「大きな羊が美である」、「羊は祥なり」などの説は、「羊」が美の象徴であるのみならず、富の象徴、吉祥の象徴でもあることを示している。ゆえに「羊」は一部の言葉において、おとなしい、善良、か弱い、素晴らしいというニュアンスを帯びているが、今もなお使われている慣用語のうち、大部分は羊の「軟弱」な面を反映しており、“羊入虎口”，“羊质虎形”，“平时如狼，危时如羊”などに見られるように、羊を虎や狼と並べて比較するものも少なくない。こうして眺めてみると、言語における「羊」のイメージは、人々が頭の中で思い描いているほど芳しいものではなく、好悪の中間に位置しているようである。

4 民話における「羊」

1992年より ISBN センターから逐次出版されている『中国民間故事集成』⁷⁾には羊にまつわる民話は32篇収録されているが、ここでは4篇を選び、日本語であらすじを紹介する。中国語の原文については原典を参照されたい。

(1) “神羊送五谷种”（天の羊、五穀をもたらす）

<寧夏卷 P.160~161より>（あらすじ）

伝説によれば、今この世にある五穀・雑穀は、元々天の羊が玉皇大帝の畑から盗んできたものであるという。

ある年の9月、天から羊がやって来た。そのころこの世には野草や木の実ぐらいしか食べるものがなく、人々は骨と皮ばかりに痩せ、真っ黄色な顔をしていた。心優しい羊がこ

れを見兼ねて、「なぜここには五穀も雑穀も生えていないのだね」と尋ねると、人々から「何だそりゃ、五穀だの雑穀だのは聞いたこともないぞ」という答えが返ってきた。

「天にはあるが」と言う羊に、「わしらは逆立ちしたって天になど昇れん」と人々。

そこで羊は、今度この世へ来る時に五穀を持ってきてやろうと約束し、雲に乗って去っていった。

さて、天に戻った羊は、玉帝の畑の見張りが眠ってから、こっそりと五穀の穂を盗み出し、翌朝、いそいそと五穀の穂をくわえ、再びこの世へ舞い下りた。

羊が来たことを聞きつけて集まってきた人々は、初めて見る立派な黄金色の穂に目を見張った。羊は、これはアワ、これは麦、これは稲、これはコーリャン、これは豆と一つ一つ紹介し、あるものは春に植えて夏に収穫し、あるものは夏に植えて秋に収穫するのだと人々に教えると、意気揚々と天へ帰っていった。

人々は羊から教わった通りに五穀や雑穀を育てたが、秋が近づくにつれて豊かに実り、頭を垂れていく穂には、天の羊の角に似ているものもあれば、羊のしっぽに似ているものもあった。こうして穀物は人々の口に入るようになり、暮らしも日に日に豊かになっていったのである。

やがて収穫の秋を迎えると、人々はあの羊を思い出し、笛や太鼓を鳴らして天の羊を祭る神事を行った。ところがこれをきっかけに、下界の至る所に五穀と雑穀が生え、まるで様変わりしたことが天界に知られてしまい、ただちに玉帝の命によって調査が行われ、羊の仕業であることが判明した。玉帝は羊が自分に知らせなかったことをとがめ、下界で羊を屠って人々に食べさせるよう命じたが、人々が穀物を栽培することに関しては不問に付した。

明くる年、羊が殺された場所にはネジアヤメが群生し、やがてそこから子羊が生まれ、人間と生活を共にするようになった。以来、草食で、肉も皮も大いに役立つ羊は、人々によって代々大切に守り伝えられてきたのである。

また、天の羊が穀物をもたらしてくれた恩を人々は忘れず、羊供養の祭りを毎年行い、「いけにえをお供えします」と唱えて、翌年の天候の順調と五穀の豊穡を祈願した。

かつて人間に掛け替えのない恩恵を与えたために命を落とした羊は、誰からも愛されており、農家では羊を宝として珍重し、民間では羊・馬・虎・犬を忠・孝・節・義の象徴と見なして四君子と呼んでいる。

(2) “羊頭会” (羊頭会)

<甘肅巻 P.320~321より> (あらすじ)

昔々、西方の羌族は東方の韃靼人に破れ、獠甘という青年とその妻、そして1匹の羊だけが生き残った。夫婦は羊に導かれるまま山道を進み、やがて四方を高山に囲まれ、木々

が生い茂る谷へたどり着いて、そこに定住した。

それからあっという間に30年以上の年月が過ぎていったが、この間、夫婦には子供が次々と生まれ、次第に谷では手狭になった。そこで彼らは外の世界へ出ていこうと思ひ立ち、谷から出る方法を考えたが、いつまでたっても妙案が浮かばない。そんなある日、あの羊が獠甘に言った。「子供たちを連れて東へ向かいなさい。東の山すそは硬い硬い岩でできているから、あそこへ着いたら私を殺して、私の皮で袋を作るのです。そして火を起こし、その袋をふいごにして風を送れば、岩が溶けて道ができるでしょう。」

羊の話は獠甘を大いに奮い立たせ、翌日、早速妻と子供たちを連れて出発し、硬い岩の所へとやって来た。が、長年苦楽を共にしてきた羊をそう簡単に殺せるわけもなく、ためらう彼を羊が叱咤した。「殺すのです。たとえ死んでも、私の魂はあなたの子孫を永遠に守るでしょう。皮袋はふいごとして使った後、いろいろな道具に作り変えなさい。そして私の頭を山頂に置くのです。そうすれば私の頭は岩と化して日陰を作り、あなたの子孫たちにそよ風と霧雨をもたらすことでしょう。」

獠甘は羊の言い付けに従った。果たして皮袋のおかげで硬い岩は溶け、皮袋からさまざまな道具を作ると、彼らは羊の頭を携え、子供たちの手を引いてにひたすら東を目指した。それから何年も歩き続け、彼らはずいに天の果てにたどり着いた。そこは太陽が昇る場所で、何もかもが素晴らしかったが、ただ一つ、彼らを悩ませたのは、太陽が昇るたびに酷暑に見舞われ、外にいられないことであった。そこで夫婦は子供たちとほら穴で涼をとり、歌を歌って暑さをしのいだ。

また獠甘が向かいの山の頂上に羊の頭を安置したところ、それは岩となり、たちまち山上に雲が沸き起こって大地に影を落とした。続いて彼は山のふもとの日陰に木を植えたが、それ以降、三日に一度風が吹き、五日に一度雨が降るようになり、一層暮らしやすくなった。その後、彼の子孫たちはこの地を開拓し、大いに繁栄したという。

獠甘の子孫たちはあの羊の恩を忘れぬよう、毎年6月、羊の頭を山頂に安置した日には、あでやかに着飾った娘たちが歌い踊る中、天を祭っていけにえの羊を捧げ、皆でその肉を食べて、羊の頭に敬意を表すことにした。

これが「羊頭会」の始まりである。

(3) “送羊” (羊を贈る)

< 河南巻 P.351～352より > (あらすじ)

浚県一帯には、麦の収穫後、母方の祖父が孫息子に羊を贈る習慣がある。この習慣の起源を見てみよう。

昔、ある家に男の赤ん坊が生まれ、両親はこの子を大層甘やかした。おかげでそろそろ物心がつくころになっても、この子は言うことを聞かず、わがままのし放題で、むずかっ

ては相手構わず当たり散らし、誰もが手を焼く子供に育ってしまった。両親は年がら年中ため息をつき、息子を見ては途方に暮れる有り様であった。

麦が黄金色になり始めたころに妻は里帰りをしたが、息子の話をするなりぼろぼろと涙をこぼした。両親はそんな娘がふびんでならず、いずれ暇を見付けて孫をよく言い聞かせに行くからと慰めた。

やがて麦の収穫も終わり、妻の父親は自分の家で飼っている羊の母子を連れて、孫に会いに行った。孫は羊を見て大喜びし、すぐに羊の首縄をつかんで遊び出したが、遊んでいるうちに子羊が遠くへ行ってしまった。すると母羊が「めえめえ」と鳴いたので、孫はおじいさんに尋ねた。「お母さん羊はどうして鳴いたの。」「お母さん羊はね、子羊が側から離れると心配でたまらなくなるんだ。だから、お乳を飲みに戻っておいでと、子羊を呼んでいるんだよ。」子羊は親の鳴き声を聞きつけるとすぐに戻ってきて、母羊のお腹の下に潜り込んで乳を飲み始めた。そこでおじいさんはまた口を開いた。「ほら、子羊はお利口さんだね、お母さんに呼ばれたら素直に戻ってきただろう。子羊はね、お母さんのお乳のおかげで自分が大きくなったことをちゃんと知っているんだ。だからお乳を飲む時、必ずひざまずくんだよ。人間も同じだ、みんなお母さんのお乳を飲んで大きくなるんだよ。子供を育てるのは、それはそれは大変なことなんだ。お父さんとお母さんは子供がお腹を空かせてはいけなと、泣き声が聞こえたら乳をやる。冬は寒い思いをさせないように、子供に暖かな布団を掛けてやり、夏は暑くてかわいそうだと、うちわで扇いでやる。お父さんもお母さんも、子供のためにいつも心を砕いているんだ。だからお父さん、お母さんの言うことを聞かなかつたら、子羊よりも聞き分けのない子だと、人様から笑われてしまうよ。」これを聞いて孫は言った。「僕、悪い子だった。これからはお父さんとお母さんの言うことを聞くよ。」

それからおじいさんは毎年この孫に羊を贈り、孫は年を追うごとにいい子になっていった。

この話が広まると、よその家でも羊を贈って孫のしつけをするようになり、たちまちこの辺一帯の習慣として定着したのである。ちなみに羊を飼っていない家では、マントー（小麦粉をこねて蒸したパン）で作った羊を贈るといふ。

(4) “老公羊智胜狼、虎、猴”（じいさん羊、とんちで狼と虎と猿をやっつける）

< 吉林巻 P.387~388より > (あらすじ)

昔々、ある家でつがいの羊を飼っていたが、雌羊は毎年子供を2匹産み、その子羊がまた子供を産み、と年々数が増えていき、5年もたつと大きな群れになった。その後、飼い主は羊たちを売り払ったが、始めから飼っていた雄羊だけは手元に残し、家の外の囲いに入れておいた。

羊に関するイメージ考察

ある日、羊は飼い主夫婦の会話を耳にした。「今度の節句の時には、この羊をつぶして食おう。」「スープにするとおいしいわよ。」羊はたまたま嘆きの声を上げた。「わしにはたくさんの子や孫がおったのに、みんな売られてしまった。その上、このわしを食おうというのか。」そしてふてくされ、囲いを跳び越えて山の中へ逃げていった。

山で羊を見掛けた狼が、「何者だ」とうろたえながら尋ねると、羊は狼など眼中にないといった風を装って大声を張り上げた。「わしの頭にゃ角が2本、ぐるぐる渦を巻いとるぞ。首は太いし、腹もでかい。おまけに食欲旺盛だ。」

狼はこれを聞くとしっぽを巻いて逃げ出し、しばらく走ったところで虎に呼び止められた。「狼の野郎じゃないか、そんなに慌てて一体どうしたんだ。」「兄貴、山に化け物がいて、そいつがおいらを食おうとしたんでさ。」こう訴える狼に、虎は言った。「そいつの顔を拝んでやろうじゃないか。案内しろ。」

2匹が山頂に行くと、羊は草を食んでいた。狼は羊の角を見て、「おい、おまえの頭にくっついてるのは何だ」と尋ね、虎は羊の股ぐらに垂れ下がっている物を見て、「おまえの腹の下にぶら下がってる、どでかいのは何だ」と尋ねた。すると羊は口を開いた。「頭にあるのは鎌2本、狼が来たら腹をかつさばいてやる。腰にあるのは虎を放り込む皮袋、虎が来たら逃がさんぞ。」

狼は頭の刃に、虎は股ぐらの皮袋に恐れをなし、ほうほうの体で逃げ出した。

逃げる途中で2匹は狼と行き会い、虎は今しがたの見聞を聞かせた。「大変だ、山に全身真っ白な化け物があるぞ。頭に刃物がくっついてて、股ぐらには皮の袋をぶら下げてるんだ。」

この話には狼は腹を抱えて大笑いした。「一杯食わされましたね、あいつは村の老いぼれ羊でさ。飼い主に食われそうになったんで、逃げ出したんですよ。おいらがとっ捕まえてやる。兄貴、行きましょう。」

3匹が山頂に行くと、羊は頭をもたげて大声で言った。「おや、猿のとこの小せがれじゃないか、待とったぞ。」「おいらを待っていただと」、猿はいぶかった。

「ほれ、おまえの親父は去年、わしとの賭けに負けたろう。あの貸しは、狼3匹、虎2匹だったな。ほう、今日は狼と虎を1匹ずつ返しに来たのか。だが、それっぽっちじゃ腹一杯にならんわい」、と羊が言うと、虎は猿の首を締め上げ、牙をむき出して罵倒を浴びせた。「このこすっからいえて公め、よくも俺たちをだましやがったな。」そして往復びんたを食らわせて山から突き落とし、狼と一緒にしっぽを巻いて逃げていったとき。

民話(1)は、羊がこの世に五穀をもたらしたとしているが、「羊は五穀の神」という言い伝えは古くから語り継がれてきたもので、歴史的伝承によれば、それぞれ異なる穀物

の穂を携えた5人の仙人が、羊に乗って天から舞い降りたという。この際、仙人たちは各人各様の色の衣をまとい、その衣と同じ色の羊に乗っていたとされるが、これは羊と人が一体化していたことの表れであろう。仙人たちは五穀を授け、「この地をとこしえに飢饉から守ろう」と約して去っていったが、彼らが乗ってきた羊は石と化してそこにとどまり、約束の実行者となったと伝えられている。この伝承が、羊は五穀の神の象徴というイメージを人々に植え付けたのである。羊と五穀が結び付けられたのは、羊が好物の麦の穂や穀物を食べようと、しばしば畑に姿を現すためであり、人々は羊を穀物の精霊と見なし、五穀豊穡をもたらしてくれること願って、羊が畑を荒らしても目をつぶることにしたのである。民話(2)は羊と人間の物語であり、羊の神がこの世に富と平安をもたらし、羊の頭は岩になったことが描かれているが、こうした羊が石と化す神話や伝説も、羊を土の神とする話も、ベースとなっているのは羊が山の神であるという神話である。山はいわば石の堆積物であり、そこには石がごろごろ転がっているため、自ずと山から石が連想されたのであろう。山の神に対する信仰は、中国では原始社会のころには既に存在していた。堂々とそびえ立ち、容易に人を寄せ付けぬ山の威容は、そこに靈力が秘められている、あるいはそこが神の御座所で、天に通ずる道であると思わせるには十分であり、ここから山岳信仰が生まれたことは想像に難くない。さらに山の不思議な形状やとりどりの山の幸もまた古代人の想像をかき立て、山は何らかの神の化身、もしくは何か形あるものが山の神であるに違いないと考えた。姜羌族は羊を山の神としていたが、現在でも古代羌族をルーツとする民族の間で、山の神、土の神、石の神が氏神、守り神としてあがめられているのは、遠い昔に山の神・土の神・石の神・羊の神が同一視されていたことの名残である。民話(3)から思い浮かぶのは、“孝道”(孝行の道)の美德として有名な“羊羔跪乳”(子羊がひざまずいて乳を飲む)の4文字である。幼少時からひざまずいて「乳を請う」のは、「母親」の養育の恩に対する感謝の表現であり、人々は「羊を贈る」ことで子供に“羊羔跪乳”という手本を示し、“孝道”の美德を身に付けさせるのである。民話(4)は、よく知恵の回る羊が、本来ならとてもかなわないはず狼たちを知略で撃退する話であり、羊びいきの内容となっている。

5 「羊」と十二支

漢代に陰陽五行思想が十二支による紀年法に取り入れられ、12の干支と12の動物は、「未は陽」、「羊は火」という具合に、陰と陽、及び金・木・水・火・土の五行に配当されたが、陰陽五行には相生相克の関係があり、12の動物にも力の強弱や気性の荒さの違いがあることから、民間では干支に基づく縁組のタブーが数多く決められた。この風習は今なお根強く、干支の相性の良し悪しが男女が結婚を考える際の先決条件となっており、もし

羊に関するイメージ考察

相性が悪いようなら、縁談は破談になる公算が大きい。未年の人の結婚については、“两只羊，活不长”（羊と羊が一緒になると長生きしない），“鼠羊不到头”（鼠と羊の夫婦は天寿を全うできない），“黑狗不能进羊圈”（黒犬は羊小屋に入れない）などのタブーのほか、“女子属羊守空房”（未年の女は孤閨を守る），“男属羊，黄金堆万两，出门不必带口粮；女属羊，命根硬，克夫克爹又克娘”（未年の男は億万長者になり，家を離れても食べ物に困らない；未年の女は生命力が強く，夫どころか両親まで尻に敷く）ということわざまであり，こうした迷信の影響で，中国には現在でも未年に子供を産むのを避ける習慣が残っている。では次に，民間に伝わる占いの小冊子の中で，未年生まれの人の性格はどのように判断されているか見てみよう。

“属羊人的性格，在中国的史书上，羊是最富温情的属相，出生在这一年的人被称为乐善好施者，他们往往为人正直，亲切，善良，易被别人不幸经历所感染，他们的脾气温顺甚至有些羞怯，他们的各方面都处于高潮时往往是风度优雅的艺术家有创造性的人，而当他们处于事业及其它方面的低潮时则是一个忧伤多感甚至悲观厌世者属羊人常因举止稳重优雅和富有同情心，而被人们所称道和欢迎。他们善于体谅别人的过错，理解别人的难处，凡事讲究和平和温和，不善于反抗，宁愿忍怒而不语，有高度的涵养和忍耐的品格。正因他们有颗象金子般纯洁和善良的心，在时间上慷慨，在金钱上大方，当你落得无处安身，袋空如洗时，你要相信属羊的朋友是绝不会见困境而不顾的。不管到哪里，他们都喜欢与人交往，并能以诚相待。一个人属羊意味着他将来有美满婚姻，他不仅会受到生活伴侣的爱，同样也会受到亲属的爱戴。据说生于羊年冬季的人，一生会遇到多种坎坷，因为冬季对羊来说是一个无食的季节，但无论属羊人陷入何种逆境他始终不必太为生活必需的条件发愁，人们会在他受难时，倍加关心他。羊在属相排在第八门，对中国人来说'八'是安定繁荣的象征。

羊人の缺点是性格忧郁，多愁善感，看问题时，目光总是阴暗，把事情想得很糟，遇事总爱拐弯抹角而不能直截了当。”（訳：未年生まれの人の性格は，中国の歴史書に，未年は最も思いやりのある干支，と記されている通りで，この年に生まれた人は慈善家と称えられる。一般的に正直で親切的な善人で，人の不幸を我が事のように悲しむ傾向がある。おとなしいたちで，引っ込み思案なところがあり，何もかもが波に乗っている時には優雅なアーティストか，はたまたクリエイターといった風情なのだが，仕事やその他の面でスランプに陥ると憂いに満ちたペシミストになってしまう。未年の人はふだんから立ち居振る舞いが落ち着いていて品があり，同情心にあふれているので，誰からも慕われる。また人の過ちを許し，その苦しみを分かちあられる未年の人は，「和をもって尊しとなす」が信条なので，人に逆らうのが苦手で，怒りをぐっとこらえて表に出すことがなく，その自制心と忍耐力の強さは並々ならぬものがある。未年は純金のように純真無垢な心の持ち主なので，時間的にも，金銭的にもおおらかである。もし誰かが無一文で路頭に迷うことになっ

ても、未年の友人はその人を決して見捨てない。なぜなら、未年は人が困っているのを放っておけない性分だからだ。また常に社交的で、誰に対しても誠意を持って接することができる。未年生まれの人には幸せな結婚が約束されており、人生のパートナーに愛されることはもちろん、親類縁者からもかわいがられる。冬は羊にとって餌のない季節、このため未年の冬に生まれた人は多難な人生を送るといわれるが、どんな逆境に陥ろうとも心配無用。未年の人が困っている時には、みんなが何くれとなく気遣ってくれるので、少なくとも最低限の生活はできる。何といても未は十二支の第八位で、中国人にとって「八」は安定と繁栄の象徴である。

未年生まれの人欠点は、性格が暗くセンチメンタルなため、ものの見方が悲観的で、物事を悪い方、悪い方へと考え、いざ事が起こっても素早い対応ができず、もたもたと遠回りしてしまうことである)

この性格判断を見ると、未年生まれの人性格はほぼ申し分なく、ほかの動物に比べて長所が圧倒的に多いことが分かる。大まかにまとめれば以下になるよう。

良い面：

「おとなしい」、「善良」、「正直」、「優雅」、「思いやりがある」、「他者を理解することができる」、「自制心がある」、「忍耐力がある」、「けち臭くない」、「人助けをする」、「誠実」

良くない面：

「感傷的」、「あまり楽観的でない」、「回りくどい」

6 おわりに

十二支の動物に対する感情は人によって微妙に異なる上、評価にしても毀誉褒貶さまざまである。例えば鼠はマイナスの評価が多く、プラスの評価は少ない。牛はプラスとマイナスが相半ばしている。竜はプラスの評価が多く、マイナスの評価は少ない……。そして羊とはいえば、人々が羊に抱く感情は最も複雑といえるだろう。羊は吉祥、善良、美のシンボルである。往時、“羊”は“祥”に通ずるとされ、また“善”や“美”も、その原義はやはり羊と関係がある。漢代の董仲舒は、『春秋繁露・執贄』の中で、“羔有角而不任，设备而不用，类好仁者；执之不鸣，杀之不啼，类死义者；羔食于其母，必跪而受之，类知礼者。故羊之为言犹祥与。”(子羊には角があるが、それで危害を加えるようなことはしない。持ってはいても使わないのだ。まるで仁を好む人のようである。捕らえても鳴かず、殺しても声を上げない。まるで義に殉じる人のようである。子羊は母から乳をもらう時、必ずひざまずいて飲む。まるで礼を知る人のようである。羊と祥がほぼ同義とされるゆえんはここにあり)と羊を絶賛している。この美質ゆえに、羊は美、祥、仁、義、礼といった象徴的な意味を付与されたのであり、いにしへの士大夫たちは羊を進物とし、子羊の皮衣を着て

羊に関するイメージ考察

朝廷に出仕していたが、これはその徳が子羊のようであることを示していた。十二支の動物の中でも、羊が持つ象徴的意味はとりわけ素晴らしく、その多さは群を抜いている。ところが他方で、羊は軟弱、臆病、弱者の代名詞で、哀れなスケープゴートでもあるのだ。羊は人類にとって身近な存在であったため、人々は何かにつけて羊を引き合いに出し、さまざまな事物と比べていたが、羊への理解が深まると、「羊にまつわること」に啓発されてインスピレーションを受けるようになり、やがて新たな概念を作り出した。これに従い、「善」、「饜」（^{しゅう}、美味の意）、「養」（養）、「义」（義）、「美」などの「羊」を含む字も新たな意味が次々と派生していったが、それはいずれも羊に関するもので、羊文化がいかに浸透し、いかに影響を与えていたかを物語っている。さらに、自然界の羊以外の事物にあえて羊が付く名を与え、物の描写や、人・事・道理などのたとえに羊を用いたこともまた、言語における羊文化の表出である。これは大自然、世界、そして自分自身に対する人々の理解が段階を踏みながら深まったことに端を発しており、この理解の深化の過程では大抵何かしらの媒体が必要となるが、その媒体には当然のことながら人々にとって馴染み深いものに白羽の矢が立てられることになる。そこで人間との付き合いが最も古い動物である羊が、しばしばその媒体の役割を果たしたのである。また、羊をトーテムとする信仰は、羊を姓とし、地名に羊と付けることに直結しており、ここから「羊動物」、「羊植物」、「羊地名」が数多く生まれ、物事や道理のたとえにも羊が多用された。この通り、「羊言羊語」（羊にまつわる言葉）の世界をのぞくと、羊文化の奥深さ、そしてその影響の大きさが見えてくるのである。

注

- 1) 中国では山羊も羊の範疇に含まれる。
- 2) 于省吾 (1963) 「釋羌・苜・敬・美」『吉林大学社会科学学報』第1期
- 3) 朱狄 (1988) 『原始文化研究』P.100 三聯書店
- 4) 趙国華 (1990) 『生殖崇拜文化論』P.252 中国社会科学出版社
- 5) “羊狼”という言葉に関しては、いくつかの解釈がある。別の説では、雄山羊と豹が戦った際、断崖絶壁の縁に追い詰められて絶体絶命のピンチに陥った山羊が、おとなしく観念するどころか、猛然と襲い掛かってくる豹に鋭い角で立ち向かい、見事手傷を負わせて撃退したことに由来するとしている。
- 6) 僧侶が腰掛ける椅子。



7) ISBN は“民間文学集成全国編輯委員会”の略称である。尚、ここでいう「民話」の概念は広く、中国の各民族に語り継がれてきた散文体の伝承文学には、種々雑多なジャンルやスタイルがあるが、神話、伝説、寓話、滑稽話、そしてさまざまな物語なども含まれ、実にバラエティーに富んだジャンルを網羅しているのである。

主要参考文献

- (1) 郝懿行『爾雅義疏』北京市中国書店影印本
- (2) 邱崇西(1983)『俗語五千条』陝西人民出版社
- (3) 北京大学中文系(1987)『歇後語大全』
- (4) 鄭宣沐(1988)『古今成語詞典』中華書局
- (5) 劉潔修(1989)『漢語成語考釈詞典』商務印書館
- (6) 張清常(1990)『胡同及其他』北京語言学院出版社
- (7) 武占坤・馬国凡(1991)『漢語熟語大辞典』河北教育出版社
- (8) 吳裕成(1993)『人與十二属相』天津大学出版社
- (9) 馬如森(1993)『殷墟甲骨文引論』東北師範大学出版社
- (10) 袁柯(1993)『中国神話通論』巴蜀書店
- (11) 王紅旗(1997)『神妙的生肖文化與遊戲』山東友誼出版社
- (12) 張皓(1997)『十二生肖』湖北教育出版社
- (13) 史有為(1997)『成語用法大辞典』大連出版社
- (14) 『漢語大詞典 簡編下』(1998) 漢語大詞典出版社
- (15) 『語海』編輯委員会(1999)『語海』上海文芸出版社
- (16) 『古代漢語詞典』(1999) 商務印書館
- (17) 鄭高咏(2003.2)『馬に関するイメージ考察 中国のことばと文化』愛知大学紀要『言語と文化』第8号